

千葉市感染症発生動向調査情報

2014年 第37週 (9/8-9/14) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		37週	36週	35週	34週
上段:患者数 下段:定点当たりの患者数	小児科	17	17	18	18
	眼科	4	5	5	5
	インフルエンザ*	26	27	28	28
	基幹定点	1	1	1	1

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

定点	感 染 症 名	千		葉		市		千葉県
		注意報	9/8-9/14	9/1-9/7	8/25-8/31	8/18-8/24	9/1-9/7	
			37週	36週	35週	34週	36週	
小児科	RSウイルス感染症	↓	10 0.59	11 0.65	11 0.61	2 0.11	44 0.33	
	咽頭結膜熱		0 0.00	2 0.12	1 0.06	0 0.00	29 0.22	
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		12 0.71	12 0.71	11 0.61	15 0.83	148 1.12	
	感染性胃腸炎		65 3.82	72 4.24	60 3.33	67 3.72	363 2.75	
	水痘	○	16 0.94	5 0.29	3 0.17	7 0.39	43 0.33	
	手足口病		24 1.41	27 1.59	7 0.39	10 0.56	162 1.23	
	伝染性紅斑		6 0.35	6 0.35	4 0.22	8 0.44	59 0.45	
	突発性発しん		7 0.41	11 0.65	19 1.06	15 0.83	69 0.52	
	百日咳		0 0.00	1 0.06	0 0.00	0 0.00	1 0.01	
	ヘルパンギーナ	↓↓	12 0.71	34 2.00	39 2.17	53 2.94	206 1.56	
	流行性耳下腺炎		0 0.00	1 0.06	3 0.17	4 0.22	52 0.39	
	インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	3 0.01
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.03	
	流行性角結膜炎		5 1.25	0 0.00	1 0.20	0 0.00	10 0.30	
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	
	無菌性髄膜炎		1 1.00	0 0.00	0 0.00	1 1.00	1 0.11	
	マイコプラズマ肺炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(9件)

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	60歳代	病原体等の検出	E型肝炎	女性	50歳代	血清IgA抗体の検出
結核	女性	20歳代	IGRA検査	デング熱	男性	60歳代	血清IgM抗体の検出等
結核	女性	30歳代	臨床診断	アメーバ赤痢	男性	30歳代	病原体の検出
結核	女性	40歳代	画像診断等	梅毒	女性	30歳代	血清抗体の検出
結核	女性	70歳代	画像診断等	-	-	-	-

・結核5件(189)、E型肝炎1件(5)、デング熱1件(3)、アメーバ赤痢1件(3)、梅毒1件(14)の報告があった。

※ 累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第37週のコメント

＜RSウイルス感染症＞前週より減少し0.59となった。過去10年の同時期と比べると最多。

＜水痘＞前週より増加し0.94となった。過去10年の同時期と比べると最多。

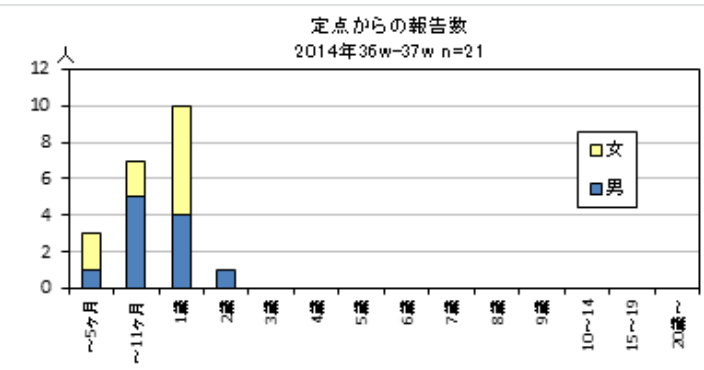
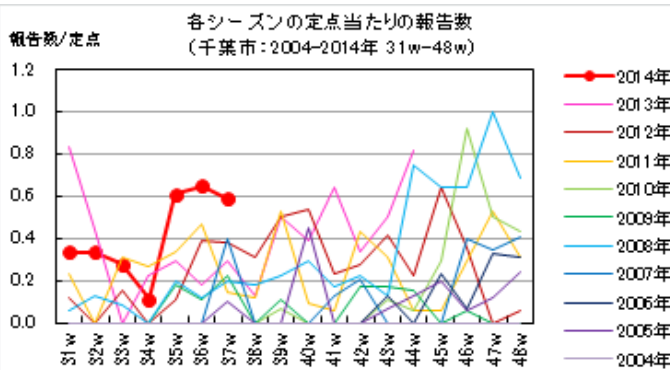
＜ヘルパンギーナ＞前週より減少し0.71となり、流行発生警報継続基準値を下回った。過去10年の同時期のほぼ平均レベル。

■ トピック ■

<RSウイルス感染症>

2014年の全国レベルの第36週現在は、過去7年の同時期と比べると多くなっています。都道府県別では、佐賀県、福岡県、長崎県の順に多く報告されています。千葉県は、全国レベルより少なめとなっています。千葉市の第37週現在は前週より減少し0.59となりましたが、過去10年の同時期と比べるとおよそ1.5倍から5倍で最多となっています。区別の発生状況では、緑区で最多で、同区の1歳で最も多く報告されています。

本疾患は、乳幼児において悪化しやすい感染症です。RSウイルスの感染力は非常に強く、多くの子どもが罹患します。感染経路としては呼吸器飛沫や、呼吸器からの分泌物に汚染された手指や物品を介した感染が主なものであり、特に濃厚接触により感染します。年齢を問わず生涯にわたり繰り返し罹患し、2歳以上から年齢を追うごとに重症度は減りますが、高齢者において時に重症の細気管支炎や肺炎を起こし、施設内での集団発生が問題となっています。特に1歳以下では、最初の感染で中耳炎の合併がよくみられます。また、乳幼児が罹患すると細気管支炎や肺炎を起こしやすく、生後4週未満では感染の頻度は低いですが、突然死に繋がる無呼吸が起きやすいとの報告もあることから注意が必要です。流行は通常急激な立ち上がりを見せ、2～5カ月間持続するとされています。通常では毎年11～1月にかけて特に都市部での流行がみられます。予防は、患者に近づかないこと、症状がある方は乳幼児から離れることや、厳重な手洗いなどです。また、ワクチンは研究段階であり、現在利用可能な予防方法としては、モノクローナル抗体製剤であるパリビズマブ(Palivizumab)の筋注による予防効果が期待できるとされています。



<水痘>

2014年の全国レベルの第36週現在は過去7年間の同時期のほぼ平均レベルとなっています。都道府県別では福井県、佐賀県、福岡県の順に多くなっています。千葉県は全国レベルよりやや少なめとなっています。千葉市の第37週現在は前週より増加し0.94となり、過去10年間の同時期と比べると最多となりました。区別の発生状況は、若葉区で最多で、同区の4歳で最も多く発生しています。

水痘は、水痘帯状疱疹ウイルスによって起こる急性の伝染性疾患です。幼児期から学童期前半に多く、冬～春に流行し、夏～初秋には減少する傾向があります。多くが10歳までに感染し、殆どの成人は抗体を持っています。感染力は強く、家族内接触における発症率は80～90%となっています。本症の潜伏期は10～21日(多くは2週間程度)で、軽い発熱、倦怠感、発疹が最初の症状です。発疹は紅斑から始まり、2～3日のうちに水疱、膿疱、痂皮の順に進行しますが、3～4日間程は発疹が新たに発生するため、これら各段階の発疹が同時に混在するのが特徴です。発疹の好発部位は体や顔面で四肢には少なく、体の中心寄りに分布します。発疹は掻痒感が強く、水疱中には多数のウイルスが存在します。合併症の危険性は年齢により異なり、健康な子供ではあまりみられませんが、1歳以下の乳幼児と15歳以上では高くなります。成人ではより重症になり、合併症の頻度も高くなります。また、妊婦が罹患すると重症化の傾向があります。予防にはワクチンが有効です。水痘ワクチンを接種しても水痘患者との接触によって6～12%の割合で水痘を発症する場合がありますが、発疹の数は少なく症状の程度も軽く済みます。また、水痘が流行している施設や家族内での予防については、患者との接触後できるだけ早く、少なくとも72時間以内にワクチンを緊急接種することにより、発症の防止、症状の軽症化が期待できます。

